

## (三) 第五〜十段落

5 前段落で明らかになった内容の核心を簡潔に記すなら、感覚器官に固有の働きによって感知され存在が確信されたものが「対象」と呼ばれ、それがなければ知（認識）はうまれないが、対象自体は知られないときにも存続する、とまとめることができる。

10 ものを考えるのは具体的なかで——これがこれまでの基本方針だったのだから、内容の整理も兼ねて、この核心を日常卑近な生活のなかの出来事として言いあらわしてみよう。おおむね次のようになる。——普通、ものは見れば見え、聞けば聞こえる。しかし、だれかあるものを見なかった人がいれば、その人はものがあることを知らず、音を聞かなかった人がいれば、その人は音の存在を知らない。それでも見た人や聞いた人には、ものも音も存在する。——前段落の核心を日常卑近なレベルで言いあらわすなら、このようにまったくなんのこともなくなる。しかしここに砕いた内容がヘーゲルの述べる内容にびったり重なるわけではないから、双方をかみ合わせ

15 「対象がなければ知（認識）はうまれない」は「音を聞かなかったら音の存在を知らない」に対応する。「対象自体は知られないときにも存続する」は「聞いた人にとって音は存在する」に対応する。その文のなかの「対象自体は知られないときにも」は「対象が感覚的確信によつて、知られないときにも」の意である。「知られないときにも存続する」と捉えるのは、もちろん考察の場をながめているヘーゲルである。しかし、この対応が成り立つのだから、日常卑近な生活のなかにある生身の人間も、ヘーゲルと同じように、対象は知られないときにも存

1 続すると捉えているはずである。

5 ところがその生身の人間がヘーゲルに「あなたは Wissen です。感覚的確信です」と言われても、なにを言われているのか皆目見当がつかない。両者のあいだには大きな断絶がある。「序に代えて」で、自分の窮境をどのように語れば良いのかわからず、その窮境にかんする共通の理解の場がないため、語れたとしても人に伝わらない事態として幼稚園児と退職サラリーマンにあらわれていたのは、こうした断絶である。ヘーゲルの生みだした断絶もことばの伝わる基盤となる共通の場がないために生まれたという点では変わりがない。どちらも種々の断絶をかかえて流れる現実の一コマということになるが、違いは、ヘーゲルの遭遇した共通の場の不在が、日常語とその思考圏をはなれ、自分の経験と思索にそくして——しかも自分なりの語彙によって——ものごとを組織的に考えようとした者を例外なくみまう断絶である、という点にある。

10 そうであればヘーゲルがその溝をどのように埋めるのかに以後の註解の関心がむけられるようになるのも自然の成りゆきであろう。と言ってもべつに方法を変えるわけではない。これまでと同じくヘーゲルのおこなった再構成を日常卑近な理解との対照において検討するだけである。ヘーゲルは形のうえで感覚的確信がことばをもちいる段階まで日常卑近な理解ないし認識 (Wissen) の再構成をすすめ、いよいよ基本的な言語運用能力や思考能力をとまなう状態で感覚的確信を考察するのだから、その叙述を丹念に追うだけである。ここでも文面を見ればヘーゲルが感覚的確信になり代わって語っていることは一目瞭然とするが、まず最初の第五段落を訳そう。これは短いので一挙に訳出する。

第5段落  
15 なお、その訳文は、「感覚的確信」を「生身の人間」と入れ換えて読むなら、ほとんど説明が不要な文章になるかもしれない。しかしそれでは右に述べた断絶が未処理のままに終わる。この読み方はあくまでも便宜的な

## 一・第五段落

5 —「だから、感覺的確信それ自体において〔感覺的確信という認識の領域において〕、対象が感覺的確信によって言われるとおりの本質として実際に存在するかどうかを考察しなければならぬ。本質であるという、対象のこの概念が感覺的確信においてその〔対象の、つまり感知されたものの〕存在する状態に合致するかどうかを考察しなければならぬ。そのために私が対象は眞実において〔現実に存在する状態〕なんであり得るかか自分をふり返っているいろいろ考える必要はない。感覺的確信がそれ自体においてどのように対象をいっているかを考察するだけでよい。」—

10 — 一読して明らかのように第五段落はヘーゲルがこれから考察をはじめ自分の態勢を述べた部分である。この態勢から次段落以降で「感覺的確信」と題された章の中心となる議論が具体的に展開されてくるが、この段落にすでに生身の人間と感覺的確信との異同がはっきり読みとれ、その異同をとおしてヘーゲルが「感覺的確信」と呼んだ *Wissen* の輪郭がかなり明確になってくる。そのためもあってこの段落にも読みこむべき内容が多い。ところが、ヘーゲルが感覺的確信になり代わって叙述するだけでなく、議論の展開が不十分なため、読み解くのに手間がかかる。冒頭の文がすでにそうである。内容をひとつずつ取りだして碎きながら検討することにしよう。

## ヘーゲルの態勢を示す最初の文

ヘーゲルがこの段落で自分の考察態度を述べたということは冒頭の文にすでに明らかである。骨組が「対象が

1 感覺的確信によって言われるとおりの本質として実際に存在するかどうかを考察し、なければならぬ」となっているからである。考察される内容が前段落で述べられていた「単なる存在は本質として措定される」を承けていることはすぐ了解できるであろう。これまでの検討に照らすならその内容は「対象は知（認識）がうまれるために必要不可欠なものである」や「それ（対象）がなければ知（認識）はうまれない」に該当する。しかも前段落で述べられていた「単なる存在は本質として措定される」は「感覺的確信のもとにある形で」とあったのだから——ヘーゲルの叙述にしたがうなら——その動作主体も叙述主体も感覺的確信である。これはだいたい問題のあるのはこの前段落の記述を承けてのことである。

10 これで一応のところ前段落との関連を確認することができたが、この確認で文意がすんなり了解できるわけではない。しかもその理由はひとつではない。それでも相変わらずヘーゲルが感覺的確信になり代わって叙述していることは大きな理由になる。だから感覺的確信に可能な活動とそれを叙述するヘーゲルの理解とをはっきり區別しながら、「言われるとおりの」から順次ながめてゆこう。

15 両者の違いを明確にするためまず個々の動作主体を明示しよう。そのためにはヘーゲルの叙述にそって右の骨組を能動形で記し、後半に主語をおきなえばよい。この操作によって「感覺的確信は対象を本質であると言いやわすが、（私は）その対象が実際に本質として存在しているかどうかを考察しなければならぬ」という文がえられる。訳文中の「言われる」は能動形にするだけでなく「言いあらわす」と言い換えてあるが、これは「言う」でも一向にかまわない。

その理由は原語の *ausgehen* にある。この動詞を語構成から日本語に訳すなら「目的語となるものを外にあら

1 える」である。この文脈にあわせて意味をだすなら「目的語となるものをこれこれのものとして他の人にあたえる（称する）」となろう。「称する」をより日常語に近いところで日本語にしたのが「言いあらわす」である。

5 この訳語に落ち着くまでの過程であらわれた「他の人にあたえる」も「称する」も、多分に「実際にはそうではない」を含意する可能性をおびる。しかしそのように指摘されても、そして前段落の「単なる存在は本質として措定される」を承けてこの段落が展開されることを考慮に入れても、すぐさま考察の急所が「措定する（あらためて対象を外界に据える）」にあると見えてくるわけではない。

10 その第一の理由は具体のなかで検討しなかりこの「措定」の意味が判然としないことである。第二の理由は——これも指摘しただけで了解できるわけではないが——「措定する」行為が感覚的確信によっておこなわれているながら、その行為を「措定」と捉える者がヘーゲルであることにある。「措定」は考察者ヘーゲルによって初めて意味と存在がみとめられる行為である。そのヘーゲルは自分の意識をながめたから「自分」や「意識」について考察することができているのだから、一般化するならこの「措定」は自分の活動をふり返ってながめられる者にだけ見える可能性がうまれる行為になる。

### 冒頭文に潜在する行為「措定する」の再考

15 自分の行為を意識的にふり返ってながめられるかどうかで「措定する」の意味がうまれるか否かを問うことが  
 一 この可能性は感覚的確信だけでなく、第三者から見るとヘーゲルの叙述にも当てはまる。特定の時・特定の場から  
 発せられたどの人のことばにも当てはまる。この註解で日常卑近な理解を比較項にとっているのは、その信憑性を確認す  
 るためでもある。

1 有効になってくる、つまり意識が自分にむかうことよって「言いあらわす」行為が「措定する」行為としてもあらわれてくる可能性が生まれる——この可能性もやはり具体のなかで検討しなければ了解しがたい。だからまず第二段落で朝の覚醒時に一瞬のスナップショット状態で確認できたことを利用しながら、感覺的確信においては「自分」が意識の対象になっていなかったという点から考えることにしよう。

5 生身の人間ならだれでも「自分」を直覚している。そう直覚された「自分」を前提としてヘーゲルは感覺的確信を設定していたと受けとめてよかった。しかし一瞬のスナップショット状態ではまだ「自分」は直覚されておらず、意識される範囲に「自分」は存在していなかった。この事実を感覺的確信に適用するなら、再構成された感覺的確信は自分を直覚する能力がない段階に抑えられている、と言いあらわすことが可能になる。感覺的確信は生身の人間がものごとを認識する在り方を段階をふんで再構成される過程でつくられたものと考えられるのだから、ヘーゲルが感覺的確信をこのように抑制した段階におくことをとがめだてする必要はない。その抑制がどれほどの妥当性をもつかはさらにヘーゲルの述べるところを読まなければ決められない。

10 そうなると、現時点でこの「意識」と「自分」との関係——つまり感覺的確信におけるその双方の関係を——検討するには検討対象を他のところにもとめなければならなくなる。だから今度は感覺的確信が拡大された直接態にあるという点をとあげよう。拡大された直接態は人間がふだん自分を意識しない状態でもあったという点である。

15 この状態を感覺的確信に適用するなら、その状態にある感覺的確信は意識を「自分」にむけない、と言いあらわすことができる。「自分」を直覚せず、意識を「自分」にむけなければ——基本的な言語能力と思考能力をともなう状態で再構成されているとはいえない——感覺的確信は「自分」をふり返ってながめることがない。いきおい

自分の行為がどのような意味をおびるのかと考えることもない。

要するに感覚的確信は自分がなにをしているかを知らない。これが一瞬のスナップショット状態と拡大された直接態とから感覚的確信の活動について言える核心的な事柄である。これまで感覚的確信のおこなう行為や活動として叙述されてきたものはすべてヘーゲルが感覚的確信にさせてきた行為や活動である。生身の人間のそれと重ねあわせて叙述されているから気づきにくいだけで、それは実際にはヘーゲルが自分の経験と思索をとおして人間のふるまいにとらえた（見ぬいた・読みとった）行為や活動である。「措定」もその例にもれない。感覚的確信はみずからおこなう措定行為をとらえる活動からおおよそ無縁である。この考察の場で感覚的確信のおこなう行為を「措定」としてとらえる者は考察者ヘーゲルだけである。

そのヘーゲルがここで感覚的確信は「言いあらわす」という行為をおこなうと述べる。「言いあらわす」行為がどのようなものは声を聞けばわかる。あるいは口の動きや文字が書かれる動作を見ればわかる。しかしその行為がおびる意味は聞いただけでも見ただけでもわからない。それならヘーゲルは「言いあらわす」行為に少なくとも一般に「言いあらわす」という表現で理解される意味以上の意味を読みとっており、それで「言いあらわす」が「措定する」の意をおびるようになつていと受けとめなければならぬ。

これで「言いあらわす」が「措定する」の意をおびる理由について一応の理解がえられるが、このままではまだ納得するところからほど遠い。まずこの文脈における「措定する」の意味をだそう。それは第三、四段落の検討（五五頁）<sup>二</sup>を承け、「感覚器官に固有の働きによつて感知され存在が確信されている単なる存在を、そのとき二 当該の文は「すでに存在が確信されているものをこれこれのものとして捉えなおし、それをあらためて外界にすえる（存在させる）」である。

1 感覺的確信にうまれた認識の本質（その認識の成立と存在にとって必要不可欠なもの）として捉えなおし、単なる存在をあらためて外界にすえる（存在させる・存在すると認める）」と表記すればよいであろう。まだ厳密に考えられる段階ではないので、最後の段階はゆるく表現しておく。

5 これで「措定」のなりたつ過程が以下の四段階から成ることがわかる。①感覺器官に固有の働きが外界に存在するものを感知する、②感知したものの存在を感覺的確信が確信する、③感知したものを生じた認識の成立と存在にとって必要不可欠なもの（本質）としてとらえなおす、④そのものをあらためて外界にすえる（存在させる・存在すると認める）、の四段階である。

10 次に、このように言いあらわすだけでは文面が一般的にすぎるので、この四段階が具体的にどのようなことなのかを、第一段落の検討で一方の手を水にさらしながら他方の掌に「ミズ」と文字を記されていたとき脳裏に生じたものを例として探ってみよう。

15 ヘレン・ケラーが戸外でポンプから汲まれた水に一方の手をさらしていたとき、指のあいだを流れる水は「感覺器官に固有の働きによって感知され存在が確信されている単なる存在」に該当する（——第一段階）。他方の掌に「ミズ」と何度もつづられているうちに名称に意味があることがわかり（脳裏にその意味がうまれて——第二段階）心躍ったとき、その脳裏にうまれた意味は「感覺的確信にうまれた知らないし認識（ein Wissen）」に該当する。実際に心躍ったときには、「これが水なのだ、これが掌になんども『ミズ』と書かれたものなのだ」という声が内心に響いていたことは想像にかたくない。

しかし、心躍った瞬間に次いで、手の触れている水が脳裏にうまれた水の「意味（概念）」にとって必要不可欠であると認識されていた（——第三段階）かどうかは、なんとも言いがたい。「指のあいだを流れるこの冷た



1 えるかぎり——③感知したものを生まれた認識の成立と存在にとって必要不可欠なもの（本質）としてとらえなおす、④そのものをあらためて外界に訴える（存在させる・存在すると認める）、という後半のプロセスも検討しなければならなくなる。この二点が「措定」行為の実質をなすからである。③はともかく④は聞きようによつてなんとも傲慢な言い方になるが、今はこの点を問わぬことにしよう。ともかく「措定」は——すでに述べたように——自分の行為を意識的にふり返つてながめられるかどうかで見えてくる可能性がうまれるのだから、まず広く意識の動きとの関連でこの二点を確認しよう。

「措定」再考——意識との関連で

10 すでに記したように③と④のプロセスはおそらくヘレン・ケラーの意識にのぼらなかつたであろう。また幼い心に強いてそれをもとめることに意味があるとも思えない。この点は拡大された直接態のなかにある生身の人間にもそのまま当てはまる。そうではあるが——意識が自分にむかわない段階に抑えられている感覚的確信はともかく——生身の人間の場合、成長するにつれて、いずれ意識は自分にむかざるをえなくなる。どれほどに、そしてどのように向かうか、その無限の変異は個別のものであり、なによりも個別に見なければならぬ。③と④が意識にのぼるかどうかも個別に見なければならぬ。あるいは個々人にゆだねなければならぬ。これは言いきかせてどうなるものでもない。

15 それでも、そして無限の変異があろうがなからうが、意識が自分にむかざるを得ないことは否応ない。自分の心に生じた意識と思考のプロセスを追う思考の働きも——自分の意識に——介入してくる。意識は意識それ自体を対象にせざるをえなくなる。いきおい、自分にむかわない意識——自分の言動がおびる意味をとらえられな

1

い意識——は破棄されざるをえず、意識はいくども瓦解と甦生をくり返す。「序に代えて」で「変貌」という語によって言いあらわされていたのはこのプロセスである。この破棄は自分の身にせまるまで知られず、そのため破棄すべきこと自体がみずから破棄したことに気づいて初めてわがこととして認識されるとしても、自分にむかわない意識の破棄を端緒としてはじまる変貌のたびに、意識は新たな装いであらわれてくる。ヘーゲルがおこなったように意識の在り方を階層化することが可能になるのはその後である。

5

意識の在り方について一般に言えるこうした事実は『精神現象学』を読み解くとき常に念頭にたもっていなければならぬであろう。彼我の違いを知るためにもそれは有用である。自分なりにその階層化を終え、意識に生じたかったもろもろの階層を組織しようとする（あるいはその前段階で自分の心に生じた意識と思考のプロセスを追うこと）——これは、社会生活を円滑にいとむ心理操作の一環として、社会が自分のなかに入ってくる度合いに限度をもうけ、ほかならぬ自分の意識の動きにたいして心をとぎす結果になっている者には、よく為しがたい。それは自分の心を問いたださなければならなくなった意識の動きに随順する者にして初めて可能な活動である。

10

しかし、この否定しがたい事実にもかかわらず、人間が集団をなす動物であり、その在り方と個人としての存在とのもたらすもろもろの問題がいわゆる人間の賢愚とは関わりのないところで生じるとあれば、この問題をかかえた『精神現象学』をそうした意識のはたらかない者に無縁であると思ふこともまた当を得ない。そう見なすことは意識を——自分の意識を、人の心を——あなどることにほかならない。

15

「言いあらわす」に読みとるべき「措定」行為についても同様のことが言える。この行為を初めて考慮に入れなければならなくなったこの第五段落とそれ以降の文脈で、ヘーゲルの関心は「措定」にふくまれる③と④の考

1 察から逸れたところで展開されるため、ヘーゲルがこの行為にからんで抱えこんだ問題をここで十分に検討することはできない。と言うより、この問題はヘーゲルの全著作をとおして常にテクストに問い質さなければならぬ問題であり、その初回となるこの場で検討が不充分にならざるを得ないのは否応ない。それなら卑近な日常の理解に照らしてヘーゲルの述べるところを検討しているこの場において「言いあらわす」が「措定する」としても見えてくるためには——あるいは③と④が見えてくるためには——自分の活動をふり返ってなめることが条件であることを頭の片隅におくだけでよいということになる。

5 そもそも、ヘーゲルがこの第五段落で意図していることは、人間がものごとを認識するときの在り方とプロセスをできるだけ意識化し、それを正確にたどることである。この点は第一段落から変わりが無い。それで第一段落の冒頭で Wissen を提示し、次いでそれを *sumich* と限定し、「直接的」と「媒介的」という対や「本質（必要不可欠なもの）」と「Beispiel（その傍らにどのような存在するもの）」等の一連の概念を組み、ここにいたって基本的な言語能力と思考能力をもつ段階まで再構成した感覚的確信に「対象は本質（認識にとって必要不可欠なもの）である」と言わせ、その言明どおりに「対象が本質として実際に存在しているかどうか」を考察すると述べるのである。右にヘレン・ケラーの体験で註解者が確認したことを、ヘーゲルは感覚的確信で確認しようとする。

10 15 そのヘーゲルが確認しようとする、つまり「措定」に含意される内容を検討するときに注意しなければならないのは唯一点だけである。それは感覚的確信に言わせた「対象が本質である」という言明が「対象は認識の成立と存在にとって必要不可欠なものである」ことを言いあらわすだけではないという点である。この言明が成りたつためにはそもそも対象が認識の成立と存在に必要不可欠なものとして存在していなければならぬ。対象

はそのようなものとして外界に存在していなければならぬ。だから感覺的確信はみずから言いあらわす「対象が本質である」という言明が実際に現実において成りたつことを確言しようとすれば、原理的にその言明自体のなかに、対象が本質（認識の成立と存在にとって必要不可欠なもの）として外界に存在することを含意させていなければならぬ。「対象が本質である」と言いあらわすことが「措定する」ことにならざるをえないのはそのためである。

これで「言いあらわす」が「措定する」になる過程をひととおり説明したことになるが、この説明が理に走りすぎていると思われるなら、前段落で述べられていた「単なる存在は本質として措定される」を利用して、次のように説明することも可能である。つまり、①感覺的確信によつて単なる存在が本質として措定されたら、単なる存在は本質として存在する↓②感覺的確信は「みずから措定した単なる存在が本質として存在すること」を真実（第一義「現実合っている」）であると思ひなす（見なす）、③感覺的確信はその「現実合っている」と思ひなす単なる存在が「現実合っている」（「真実の」の第二義）とも思ひなす（見なす）、である。この説明のほろが素直な理解かもしれない。

### 「措定」に内在する難点

それでも問題はのこる。「措定」をふくまざるを得ないものとしての「言いあらわす」行為をすることは感覺的確信による一方的な行為である。あるいは感覺的確信が単に「思ひなす」だけである。そのように措定をふく三 措定にかかわるこの難点のちのちまでヘーゲルをとらえて離さない。それは考察の場にすえられた感覺的確信と考察者ヘーゲルとが一致したときに記された「主観性は措定するという規定をもち、これは私自身によつて存在するという

1

くんで言いあらわした時点では、感覺的確信によって本質として措定された対象が実際に措定されたとおり外界に存在するかどうか——「措定」の実質をなす③と④（十頁）がふくまれているかどうか——を感覺的確信はただ確認していない。だから感覺的確信——あるいは感覺的確信を再構成したヘーゲルは——あらためて「対象が本質として実際に存在するかどうか」と問わなければならない。

5

これが最初の文の骨組でまずヘーゲルの言わんとしていたことである。ヘーゲルは「措定する」行為に検証が必要であると言っていたのである。この言明は「措定」行為にふくまれる難点にたいするヘーゲルの最初の指摘になる。しかし感覺的確信は「措定する」行為をとらえる活動から無縁である。したがって感覺的確信は「対象が本質として実際に存在するかどうか」と問うことも、その結果を確認することもできない。この難点を解消することはヘーゲルにゆだねられざるを得ない。

10

「言いあらわす」と言えば、言明としてはまったく日常的で、なんの疑問も生みださない。しかし言いあらわされた事柄をそのまま信じるなら軽率のそしりをまぬがれない。その行為は自分を見ない者や一途に自分を信じる者にとって盲点と落とし穴の宝庫である。この点は生活や仕事のさまざまな局面で日常茶飯のできごととして経験されており、ここでわざわざその例をあげることもないであろう。しかし自分を見る者にとって落とし穴のほうは底が知れない。それは前頁の欄外注に記したとおりである。

一般に学術的な著作や論文で「措定」と記せばなにごとかを述べたつもりになれ、また読者としてもその印象を受けるかもしれない。ところがヘーゲルは思索をかさねるほどに思索するという活動がどこどのように根拠することである。この措定すること、行為すること等々は、私自身によって起り、内容の如何にかかわらない。産出することとはそれ自体一面的な規定であり、所産は単に措定されたものにすぎず云々」という言明になってあらわれてくる。

を得ているかを問わなければならなくなってゆく。ヘーゲルは「措定」にそなわる一面性に念頭を支配され、その不全感に悩まされて尽きるところがない。そのあげくヘーゲルはみずから思索する者としての自分を破棄——ヘーゲルの用語では止揚——しなければならなくなってゆく。これは深刻な事態であると同時に、だれであれ自分を知らうとする者を例外なくみまう事態である。そうであればその過程でヘーゲルがどのように身を転じていったかを見なければヘーゲルについてはなにを言ったことにもなるまい。

以上で現時点における「措定」の検討とその補足はたりである。今度はヘーゲルが「言いあらわす」行為を検証する過程の検討である。

### 概念

「言いあらわす」行為にたいするヘーゲルの検証は、当初、感覺的確信の形成した概念が現実に合致するかどうかを現実に照らし合わせて確認することからはじまる。具体的には二番目の文にある「本質であるという、対象のこの概念」からはじまる。「この」は冒頭文中の「対象が感覺的確信によって言われるとおりの本質（であること）」を受ける。

受けられた部分の骨組をとりだすなら「対象は本質である」である。この文面を見るなら、それが「対象は何なのか」という問いにたいする答に相当することがわかる。それに加えて、その相当部分（つまり「対象は本質である」）は——ヘーゲルの叙述によれば——感覺的確信がみずから言いあらわしたことになる。これは感覺的確信にうまれる「知（認識）」になる。それをヘーゲルはここで「概念」と呼ぶ。これはこれまでの検討でもちいてきた言いまわしでは「脳裏にうまれるもの」に該当する。ここにも感覺的確信が生身の人間の日常卑

1 近な理解を基盤に再構成されていることが読みとれる。

5 したがって感覺的確信に生まれた「対象は本質であるという、対象のこの概念」はこれまでの検討でもちいてきた（「意味」と言い換えてもよい）「概念」と同一と見なすことができる。当然そのときの「概念」には「規定する」や「措定する」の語義を確認したときに認められた基盤的なイメージもふくまれてくる。この点を確認したうえでヘーゲルの検証活動を検討しよう。

10 まず検証活動のむかう方向に見当をつけるため、段落冒頭の文の一部に傍点を付して「対象が感覺的確信によって言われるとおりの本質として実際に存在するかどうかを考察しなければならぬ」と記そう。これで傍点部分の言いまわしが考察対象を疑問形で提示して考察をはじめるときのレトリックに類する表現であることが見えやすくなる。当然、冒頭の文による言明の実質は「対象は実際には感覺的確信によって言われるとおりの本質として存在していない」となり、対象の認識と存在にとって必要不可欠なもの（本質）は単なる存在（対象）からなにか別のものへ——おそらくは概念へ——移行するのであるかと推測することも容易になる。

15 ではその移行は実際にどのようなようにしてなされるのであろうか。  
 ヘーゲルが実際におこなうと述べる作業は、すでに確認しておいたように、「概念が感覺的確信において対象の存在する状態に合致するかどうか」である。これを簡略化するなら、概念が物に合致するかどうかである。脳裏に生まれた理解が現実中存在するものに合致するかどうか、「ミス」と掌に記されたときに脳裏に生まれたものが他方の手で触れている水と同じであるかどうか、である。

この検証は当然の作業である。感覺的確信がつくったものとして概念を提示しているとはいえ、その提示はヘーゲルの考案である。この考案が概念ともども——広くいえば自分の考えたこと理解したことが——現実に合致

1 するかどうかはだれもが常に検討しなければならない。その検証をおこなえば現実から仕返しを受ける。この点では哲学者とて変わりがない。第五段落の冒頭に記された二文（原文ではコロンによって区切られた一文）には、アカデミズムのなかでしかもちいられず、そのため一般語として存在しない「措定する」という語が潜在していたため、難解なことが言われているように見えるが、根本は万人につうじる基本である。

5 これに残りの部分はさっと処理するだけで済むであろう。実際の検証は次段落からはじまるからである。「そのため」からはじまる最後の二文は、考察者であるヘーゲル自身があれこれ考えるべきことではないというだけのことで、自分が規定したり措定したりしないで、対象が感覺的確信において存在するがままに捉えようというだけのことである。

10 そのため実際の考察では語彙が感覺的確信の使えるものに限定される。それは卑近な日常のなかにある生身の人間が使える語彙である。だから、これまでヘーゲルがもちいてきた語彙のなかでは、ものは存在すると言われたときの「もの」がまず使える。次に、その「もの」がなければ感覺的確信には認識（*ein Wissen*）が生まれなから、認識が生まれるために「必要不可欠なもの」という意味での「本質」が使える。

15 「本質」と訳せば日常語から外れるように見えるが、原語は英語なら動詞 *to be* の変形でしかない。これは日常語と見なししてさしつかえない。感覺的確信の使える語は基本的にこの二語になる。この二語は「もの」は見る人にとってそのものの存在を確信するための本質（必要不可欠なもの）である「もの」のようにもちいることができる。

他方、「感覺的確信がそれ自体においてどのように対象をいだいているかを考察するだけでよい」と述べるヘーゲルは、叙述者として存在するだけに自分を抑える。つまり感覺的確信が語るはすのことを——感覺的確信に問いかけながら——それに代わって記述するだけの立場をまもると言明する。この態度は感覺的確信の在り方を

1 感覺的確信それ自体に語らせようとするとするヘーゲルの方法をも示している。感覺的確信は実際にはヘーゲルのつくったものだから、この方法に当初から不備があることはすでに明らかであるが、わざわざこの不備にとらわれる必要はもうないであろう。最後の「感覺的確信がそれ自体においてどのように対象をいだいでいるかを考察するだけでよい」では、考察する者がはしくもヘーゲルになっているが、これもすでに検討の必要がない。次の段落に移ろう。

## 二 第六段落

この段落では、直前の「感覺的確信において対象がどのように存在するか」を承け、概念が対象に合致するかどうの考察が実際にはじまる。この段落も一挙に訳出する。

10 — 「だから感覺的確信自体に「このもの（これと指し示されるもの）」は何か」と問わなければならない。もし私がそれ（これと指し示されるもの）を今と此処というその存在の二重の形において（今と此処という点から）<sup>四</sup>受けとめるなら、このもの（これと指し示されるもの）がその存在において持つ弁証法は、このもの（これと指し示されるもの）それ自体と同じくわかりやすい形をとるであろう。だから「今と指し示されるものは何（いつ）か」という問いにたいして、たとえば、「今と指し示されるものは夜と指し示されるものである」と答えてみよう。この感覺的確信の真実を検証するには、簡単な試みをするだけで充分である。この真実を書きとめるのである。真実は書きとめたからといって失われるはずはない。同じく保存することによってその真実が失われ

四 「形」は Form の訳である。訳語としては「形態」も可能。しかしこの文脈で原語を現在の日本語にするなら「点」のほうがわかりやすいと考える。

るはずもない。「だから」今が昼になってから、その書きとめられた真実をもう一度ながめてみよう。すると私はその真実が気の抜けたものになっていると言わざるをえなくなる。――

文意が不明瞭になるのを避けるために最初と最後に「私」を訳出しておいたが、この段落でも感覚的確信に問うのも答えるのも考察者ヘーゲルである。まずこの点を確認しておこう。次に、ヘーゲルは考察の場にあるものになんら干渉せず、それを手つかずのまま（直接的に存在するがまま）にしておいたのだから、「このもの」が感覚器官に固有の働きによって感知されたものであることもあらためて確認しておこう。それは外界に感知したものである。それを「このもの」と訳すことは日本語としてあまり自然な表現ではない。ヘーゲルは次に時間と場所を問う姿勢をしめしているのだから「このもの」はなおさら不自然である。

この語は指示作用を意味するだけだから単に「これ」のほうがわかりやすい。ただ、原文では、「これ」に相当する語が *das Diese* と大文字で書かれ、それに定冠詞がついている。この表記は *dieses*（英語では *this*）が名詞としてあつかわれていることを意味する。「このもの」という訳もそれなりに理由があるわけであるが、亀甲括弧で「これと指し示されるもの」とおぎなつたのは、後に述べる言語記号にそなわる指示作用を訳にだすためである。定冠詞の働きをふくめてこの表記を訳すなら「私が『これ』と言えば読者がわかると私が判定するその『これ』」である。<sup>五</sup>

さらに、このような場合にもちいる日本語の「もの」は、具体物を意味する名詞を利用してどれと指し示すことはできないが、外界になにかが存在することはうたがいが無いと思われたとき、そう思われた外界の対象を意味する。対象の内容や輪郭がどれほど不明確であろうが、存在すること自体はうたがわれない対象を意味する。そ

五「これと言われるもの」と訳すことも可能であろうが、そう訳すと総称の意になりかねないので、この訳は取らない。

1 の意味での「もの」はこれまでに多用してきた語である。ヘーゲルのもちいる「もの」も狭義の直接的な状態では、感知されたとき、なんであるとも言いあらわせないのだから、結局はこれと同意である。だからここでもその「もの」をもちいよう。

5 その場合、外界になにかを感知すれば、感知したものはなんなのかと問うことが可能になる。ヘーゲルはその感知したものを「今と此処」の点から考察すると述べる。ここで時間の念と空間の念を導入したのはヘーゲルである。感覚的確信が問われている当事者だから、この導入は感覚的確信にもその双方の念があつて初めて可能になる。やはり感覚的確信は言語能力と思考能力をもつことになっている。では「これ」と指示され、時間の念と結びつけられた「このもの」が「その存在において持つ」とはどのような状態なのか。

10 この言いまわしにふくまれる「持つ」は haben (英語の have) の訳である。ドイツ語の haben をはじめとする欧米語の「持つ」の意味する範囲は、日本語の「持つ」が日常語として意味しやすい「手に持つ」などよりかなり広い。ここでは「対象(このもの・これと指し示されるもの)が存在していれば、その対象にそなわる」と受けとめよう。そう受けとめたとき、「このものがその存在において持つ」と限定された「弁証法」は外界に存在することになる。

### 弁証法

15 ここでは慣用にしたがつて原語の *Dialektik* を「弁証法」と訳したが、ギリシア語由来のこの語は、構成要素から理解するなら、「対話や弁論の技術」である。その「技術」はことばにかかわる。対話も弁論もことばを運用する仕方のひとつだからである。しかしここでヘーゲルのもちいる「弁証法」は現実に存在する対象にそなわ

る。語源的な意味とは存在する領域が異なる。

では外界に存在する対象にそなわる「弁証法」とはなんなのか。

対話がことばのやりとりから成るといふ点に着目するなら、「このもの」には相互的な行為があると考えることができる。少なくともふたつのものが互いになにかを交わすことは推定できる。しかし対象が「このもの」と単数で言われているときに、なぜふたつに分かれる動作ができるのか。

考察の場にあらわれているのが対象と概念だから、「弁証法」はその両者の相互的な行為を意味するのではないかと考えることはできる。しかしまだそう確定的に語ることはできず、それ以上のことは考えられない。この点でも語源的な意味は役立たない。結局、ヘーゲルが実際に「弁証法」という語にどのような意味をこめていのかは、このあとのヘーゲルの叙述を読まなければわからない。結果的に、どのような訳語をもちいようとヘーゲルがこの語にこめた意味はわからない。この語がでてきたのはこの文脈が初めてであり、その意味でもヘーゲル自身の叙述をとおして理解しなければならぬ。

では「今と指し示されるものはなに六（いつ）か」にはじまる議論は、ヘーゲルの述べるように、本当に「このもの自体と同じくらい」わかりやすいのかどうか。

六 原文では das Jetzt である。その意味を汲んで文字どおりに訳すなら das Dieses のときと同じように「私が『今』と言えば現実のどの時点かが読者にわかる」と私が判定するその「今」となる。本文に記した「今と」はヘーゲル以外の者も語れることを前提にして可能な言いまわしになる。「今で」とすればことばを手段とした表記になり、話し手がヘーゲルだから「今で指し示されるもの」はこの文を語る者がヘーゲルであることを明示した言いまわしになる。簡略的には「今はなにか」である。

15

10

5

1

ヘーゲルの議論——「今はなにか」「今は夜である」

5

それが問題である。原文を文構成にそくして訳した「今と指し示されるものは何(いつ)か」が日本語の文としてなんともぎこちなく、日本語ではふつう時間を訊ねるときに「時」や「日」などの時間にかかわる語をつける等々のこと——日本語とドイツ語の違いによって生じる種々の問題——はここで除外しよう。こうした点はこの文脈でどうしても処理しなければならない問題ではない。ヘーゲルは「対象が感覚的確信によって言われるとおりの本質として実際に存在するかどうかを考察」するために「今と指し示されるものは何(いつ)か」を取りあげたのだから、「今と指し示されるもの」は「このものとは何か」の「このもの」に、つまり「対象」に対応することをまず確認しよう。そう確認したうえで、この問いとその答において、対象と本質がなんに該当するかをとらえることから検討をはじめよう。

10

ところがその検討が厄介である。ヘーゲルの述べる「対象」は感覚器官に固有の働きによって感知し存在が確信されたものであった。したがって「対象」は一応のところ「今と指し示される現実の一時点」と受けとめることが可能である。そのときに指し示す主体は考察者ヘーゲルである。しかし語もまた指し示す。「ミズ」を検討したとき、「掌になんども記された『ミズ』という言語記号が現実の水と脳裏にうまれた概念とを媒介して(結びつけて)いたことはまちがいない(九頁)」と述べておいたように、語は現実中存在するものと概念との双方を指し示す。だからこの点を踏まえて基礎的な面からヘーゲルの問いを検討してみよう。

15

ここで「今と指し示されるものは何(いつ)か」と語る者はヘーゲルである。考察者ヘーゲルが感覚的確信によって答えられるはずの問いをだし、みずからそれに答える。その際ヘーゲルは素手で現実の一時点を指し示す

わけではない。「今」という語でそれを指し示す。しかも「今と指し示されるものは」と語することは「今」の概念がすでにヘーゲルと感覚的確信との双方の念頭にあって可能になる。

このように「ミズ」だけでなく「今」という「語」にもやはり指し示すものがふたつある。現実の一時点と概念である。その双方が結びつけられて「今は」という表現が可能になる。したがって「対象が感覚的確信によって言われるとおりの云々」と述べられたときの「対象」は、単に「今と指し示される現実の一時点」と記すよりも、「『今』という語の指示対象のひとつである現実の一時点」と記すほうがことばの存在と働きを考慮した表現になる。ヘーゲルの記述では語と概念との区別が明瞭ではない。

では他方の「本質」は「夜」なのであろうか。

これも簡単には言い切れない。「本質」は「必要不可欠なもの」と捉えてよかつたのだから、問われている現実の一時点（対象）がどの時間帯に属するのかに答えるためには、たしかに、「夜」は「必要不可欠なもの」であり、その意味では「本質」と言つてよい。

### 「今は夜である」再考

しかし「夜」という語にも指示対象がふたつある。概念としての「夜」と現実の時間帯のひとつとしての「夜」である。ここでは「もの」も「本質」も「対象」も「今」も「夜」も——ことばであるかぎり——指示対象がふたつあることを無視しては考えることができない。だから「今と指し示されるものは夜と指し示されるものである」をあらためてことばと現実との関係からながめてみよう。それも、ヘーゲル自身がドイツ語の語法を無視して考察しているのだから、同じく語法を無視してながめてみよう。

1

この文を現実の事態にそくして捉えるなら、ある者（ヘーゲル）が「『今』」という語で指し示される現実の時点は「夜」という語で指し示される現実の時間帯である」と言ったことなるう。その「今」は現実の時間としてそれほど長くない時間が念頭におかれているだろうから、内容にそくしてもっと正確に記すなら「『今』という語で指し示される現実の時点は「夜」という語によって指し示される時間帯のなかにある」のほうが適切である。

5

その「夜」を辞書で引くと「日の入りから日の出までの間」とある。別の辞書では「太陽が地平線の下にあって暗い時」ともある。いずれも意味（概念）である。その点では「今と指し示されるもの」も「夜と指し示されるもの」も、現実の一時点を指すと同時に、「脳裏に生まれるもの（ないし脳裏にいだかれているもの）」を指し示す。要するにどちらも現実の時間でも概念でもあり得る。ではこの文脈で「今と指し示されるもの」をどちらで受けとめるべきなのか。

10

この点を決定するためには「今と指し示されるものは」と語ることが可能になる条件をもっと見なければならぬ。そのように現実の時点を示すこと——簡略的に言えば「今」と指し示すこと——は、なにかあるものを「これ」と指し示すだけではない。なんらかの物体を指し示すことは指をもちいるだけでも済むが、「今」と現実の一時点を指し示すことは過去・現在・未来という時間にかかわるひとまとまりの概念があることを前提とする。このひとまとまりの概念は「今と指し示されるものは」と語ることが可能になる条件のひとつである。そ

15

七 この書き換えで「である (so is, 英語では動詞 is)」は「存在する」の意に変わる。コブラとしての「である」を個々の文例にそくして分析すると、種々の意味があらわれてくる。これはコブラをもちいた主述の構造を固定的に捉えるべきではないことを示唆する。ヘーゲルの述べる「今と指し示されるものは云々」はその一例である。

1 のひとまとまりの概念は「今と指し示されるものは」と語ることにあって、あるいはその内容を脳裏に浮かべることにあって、必要不可欠なもの（本質）である。

5 第二の条件は言うまでもなく対象の存在である。感覚器官に時間を感じする固有の働きがあるかどうかはなんとも言いがたい。これは日常卑近な意識にそくして考えても答をだせぬであろう。それでも、ヘーゲルのだした問いと答がともに成りたつためには、少なくとも、現実の一時点が直覚的に感知されたものとして実際に存在していなければならぬ。これは否定しようがない。その現実の一時点は「今と指し示されるものは」と語ることにとつて——この表現によつて理解される内容が脳裏にうまれることにとつて——必要不可欠なもの（本質）である。

10 これで検討は振り出しにもどる。「今と指し示されるものは……」と語るときには「概念」が「本質」となることもあれば「対象」が「本質」となることもある。ところが他方で、そう語るために現実の一時点が必要不可欠であることはうたがないが、概念としての「今」がなければその現実の一時点はさだまりようがない。その意味では「今」の概念のほうが「今と指し示されるもの」という知（理解）がうまれることにとつて必要不可欠なもの（本質）になる。現実が存在するある対象をある現実の脈絡やある文脈で過不足なく限定して指し示すためには、その対象が必要不可欠であると同じほどにその概念が必要不可欠である。

15 「ミス」の概念が脳裏にうまれたのはその恰好の事例である。手をひたす水（対象）の認識にとつて、掌になんども書かれた「ミス」という文字は単なる文字ではない。それは「水」がなんなのかを、その「概念」をつたえるために書かれた文字である。その文字と対応させているあいだに指のあいだを流れる水（対象）がなんなのかかわかつて（その概念がうまれて）初めて心躍ったのだから、ヘレン・ケラーの体験においても、手にふれる

1

水だけでなく水の「概念」が「必要不可欠なもの（本質）」である。その概念を説明しようとするれば、「今」であれ「ミズ」であれ、いずれ説明はしどろもどろになる以外にないとあれば、説明する必要がないという点でも同一である。

5

要するにどちらか一方だけを「本質」とすることがまちがいののである。これで「本質であるという、対象の概念が感覚的確信において（対象の）存在する状態に合致するかどうか」検証しようとし、その考察のための事例として「今と指し示されるものは夜と指し示されるものである」を提示したとき、ヘーゲルはおそらく事態を十分に煮つめないまま提示したであろうと推定することができる。さもないければ別の意図があったと考えなければならぬ。

10

ではどちらなのか。

#### ヘーゲルの意図にあわせた検討

以下では、できるだけこの文脈でヘーゲルが想定していたであろうと推しはかれる答に合わせて、検討をつけてみよう。具体的には、前の検討（二二頁）で「今と指し示されるもの」が「これ・このもの」であり、それが「対象」であると受けとめることができたという点からあらためて考えてみよう。

15

その場合「対象」は現実の一時点になる。そして「今と指し示されるもの」がどの時間帯に属するかを決定するために必要不可欠なもの（本質）は「夜」になる。その「夜」が「夜と指し示されるもの」に可能な指示対象のどちらなのかという点では、すでに明らかかなように、「現実の時間帯」は「日の入りから日の出までの間」という「概念」がなければ定まりようがなく、したがって、「概念」としての「夜」が答として「必要不可欠なもの

の（本質）になる。

この点は簡略化した「今は夜である」という文をながめても明らかである。語と概念を区別しない日常表現であるこの答によって、聞き手は「今」という現在の時点がどの時間帯におさまるかを知ることができる。普通はそう知るために「今はいつか」と訊くのだから、聞き手としてはこれで目的が達せられる。「今は夜である」においては、「今」が対象であり、「夜」が本質である。結局「このもの（これ、これと指し示されるもの）」は「なにか」という問いにたいする答では、述語におかれた概念が認識にとって必要不可欠なもの（本質）になる。

以上の検討に照らすなら「今は夜である」が真実であることはもはやことわるまでもない。

問題はそのあとである。「今は夜である」という答が真実であるかどうかにかんするヘーゲル自身の吟味はこのあとからはじまるからである。この答を考察するときにヘーゲルが実際におこなうと述べる操作は「書きとめる」ことであった。「真実は書きとめたからといって失われるはずはない」がその理由である。それに続く「保存することによってその真実が失われるはずもない」も同じ理由をさす。

たしかに「真実」は通念的にはヘーゲルの述べるとおりかもしれない。しかしヘーゲルは「対象が感覚的確信によって言われるとおりの本質として実際に存在するかどうか」を考察しているのだから、その「真実」は第一義「現実合っている」である。現実合っているかどうかは、書きとめることにも保存することにも直接の関わりをもたない。

最後の「今が昼になったとき、その書きとめられた真実をもう一度ながめてみよう。すると私はその真実が気の抜けたものになっていると言わざるをえなくなる」という叙述はさらに問題をはらむ。「今は」と言うことが可能になる条件をあらためて検討することから、ヘーゲルの述べる内容をときほぐしてゆこう。

「今は」と言うことが可能になる条件——再考

「今」という語はだれでも知っている。だれもが日常のなかでかくべつ意識することもなくもちいる。辞書にも記載されている。その語義をだすなら前にあげた記述が見つかる。その語義は概念と言うこともできる。その語義ないし概念の例である「過去と未来との境になる時」としての「今」は、現実の時間のどの時点をさすこともできる。しかしその「今」は、それだけでは、現実と結びつかない。脳裏にあるだけでも、辞書に記載されているだけでも、現実とは結びつかない。だれかが「今は」と実際に言ったときになって初めてどの時刻ないし時期をさすのが明らかになる。語も概念も文のなかに導入されて初めて現実とむすびつく。ある者が「今は」と言った時点が「今」なのである。しかもその「今は」という発言によって指示される現実の時間上の一点ないし一時期は、その発言によってそのたびに指示される時刻や時期を変える。時間的にどれだけ長いかはそのとき話し手がどれほどの時間を想定しているかによる。

整理しよう。「今は夜である」という文が意味をもつ（指示対象が生まれる、「今」という語ないし概念が現実と結びつく）ためには以下の三点が不可欠である。①この文を話す者が必要である、②その話し手が「今は」と言った時点が「今」である、③「今」によって指示される現実の時間上の一時点は指示されるたびに変わる、である。

したがって今が現実には夜であるときに言った「今は夜である」という文の内容は現実と合致しており、たしかに「真実」である。しかし「今が昼になったとき、その書きとめられた真実をもう一度ながめてみよう。すると私はその真実が気の抜けたものになっていると言わざるをえなくなる」という叙述は成り立たない。右記の②と

③に反するからである。ヘーゲルは「永遠の真理」といった言いまわしに引きずられたのであろうか。あるいは通念となっているこの言いまわしを利用したのであろうか。どちらにせよ「眞実」をもちいたこの叙述は思い付きの域をでない。さもなくば、ここでもまた、まだ見えていない意図があると考えなければならぬ。

では、前者であるとした場合、ここまでの検討では成り立たない自分の言明をヘーゲルはさらにどのように説明するのであろうか。次段落を見よう。

### 三、第七段落

この段落は内容に応じて三分することができる。まず最初のまとまりを訳そう。このまとまりでは了解しがたい文が連続する。前段落と同じく議論が不充分だからである。概念にそなわる「否定的なもの」という性質がこの段落の結論になっていることを念頭に読んでいくことにしよう。

#### 第一のまとまり

——「今と指し示されるもの〔時〕は〔私がそう指し示したときには〕夜である。〔そう指し示された「今」は私によってたとえば紙の上に書きとめられ〕保存される。つまりそれ〔今と指し示されるもの〕は言いあらわされた通りのもの、〔紙の上に〕存在するものとして扱われる。ところが〔そのように保存されると〕、それ〔今と指し示されるもの〕はむしろ〔現実には〕存在しないものであることが明らかになる。今と指し示されるもの

八 ヘーゲルは「措定」の実質をなす③と④は検証しないまま対象を夜から昼に変えている。この点からもヘーゲルの文脈で「措定」行為を検証する意図はないと見ることができぬ。

1 それ自体はもちろん「紙の上に語句として、もしくは脳裏に概念として」それ自体を維持する（「存続する」）。しかし「時間が過ぎていくので」夜でないものとしてである。それ（「今と指し示されるもの」）は昼と指し示されるもの（「時」）は「私がそう指し示したときには」昼であるが、「同じく時間は過ぎてゆくので、いずれ今と指し示される時には」昼でないものとして、結局は一般に否定的なものとして存続する。――

5 冒頭の文中にある「保存される」は「書きとめられる」と実質的に変わりがない。そして書きとめること自体に問題があるわけではない。問われている真実に関わりがないというだけである。この「保存される」については他にも指摘できることがある。「保存」はヘーゲルだけがするわけではない。「今」と言われる語の意味ないし概念はあれこれの辞書にすでに保存されている。ヘーゲルが保存しようと、辞書が保存しようと、その保存も書きとめる行為も「今は夜である」が真実であるかどうかに関わりがない。その「真実」で問題となることは、むしろ、ヘーゲルが「今」という語に可能な意味（指示対象）である「概念」と「現実のある時点」とをうまく書きわけていないことである。

10 右に訳出した文章から亀甲括弧のなかにおぎなつた語句をはずすなら――すでに明らかのように――ほとんど意味がとれず、ヘーゲルがなにを言わんとしていたのか理解に苦しむ文章になる。おぎなつた語句は言語記号に指示対象がふたつあるという理解にもとづく。だから言語記号にかかわる基本をあらためて欧米語で確認しておこう。

「記号」と言えば交通信号や朝夕に鳴る鐘の音も記号（指し示すもの）になるが、ここでは言語記号（語）を

1 検討するだけでよい。その「記号」は英語で sign<sup>九</sup>、フランス語で signe である。いずれもラテン語の signum に由来する。その動詞は signo で、これは「(記号で) 印をつける」の意である。もうひとつ signum からつくられる動詞がある。それは significo で、これは「記号で指し示す、知らせる」の意をもつ。ここで両語の違いをくわしく検討する必要はない。英語の signify とフランス語の signifier が後者の近代形で、いずれも「記号で指し示す」の意であることを知るだけで足りる。その名詞 signification は、当然、「意味」と訳すことも、「(言語記号で) 指し示すもの (指し示されるもの)」と訳すことも可能である。

5 このように日本語で一般に「意味」と訳される語は語源的にも「指し示すもの・指し示されるもの」と訳してかまわないことがわかる。この理解にくわえてさらに語に指示対象がふたつあるという事実を考慮に入れておこなったのがさきの検討である。そのふたつをあらためて記すと「脳裏に生まれたもの (概念・意味)」と「現実に存在する対象」である。一般には前者だけが意味と呼ばれ辞書に記載されるが、それは前者を知る必要が日常よく生じるからではない。

10 こうした言語記号にかんする基本的な理解はヘーゲルが『精神現象学』を公刊した十九世紀初頭にまだ存在していなかった。ヘーゲルが概念と語と現実の時点とをうまく書きわけていない根本の理由はこの点にある。二番目の文から奇異な議論が展開されるのもそのためである。どれほど独創的な哲学者や思想家であろうと、その思索にあらわれたもののほとんどは先人から学んだものである。いわゆる独創性や天賦の才はよってきるところをとり違えることで生まれた理解であろう。ヘーゲルの窮状もつて察すべしである。

15 そのヘーゲルが一気呵成に書いたであろう奇異な議論とおして言わんとしていたことは種々の補いによって九 ここではわかりやすさを優先して主に英語を挙げる。

1 了解できるものになっており、あらためて内容を反復する必要はないと思われる。それでもヘーゲルが「今と指し示されるもの」を対象から概念に移したことはまだ訳文から明瞭に見えてこないかもしれない。

5 第六段落を検討しているあいだに「今と指し示されるもの」は対象にも概念にもなれることがわかったが、その理解のままではヘーゲルの展開する文脈が理解できない。それで「今と指し示されるもの」は「このものとはなにか」の「このもの」に対応するという確認(二二頁)に一旦もどり、「今と指し示されるもの」をあらためて現実の一時点と捉えなおし、またそれを「対象」とすることでヘーゲルの叙述に理解を合わせた(二六頁)のであった。ところがヘーゲルは、こうした操作が不要であったかのように、この第七段落で「書きとめる」を利用して、最後に「今と指し示されるもの」が「否定的なものとして存続する」と述べる。これまでの検討で「概念」と呼んできたものとして存続すると述べる。

10 対象にも概念にもなり得る「今と指し示されるもの」を一方から他方に移行させたのであれば、ヘーゲルはそれなりの意図があつてこの議論を組んだと見なければならぬ。当初は問われている真実に関わりがないと見られた「書きとめる」や「保存する」もその意図からうまれたものと解さなければならぬ。そうであれば以後の叙述ではその意図に注目すればよい。ヘーゲルの議論はまだつづくので、そう確認したうえで、以下、なお残っている点について補足することこのままとりの検討を終えよう。

15 第一は訳文が既訳と異なっている点である。これは関係節の処理にかかわる。その部分を継続的に訳した最  
 一〇 該当部分を全集訳は「夜であるところの今が貯えられるのは」と訳す。榎山訳は「夜であるいまは貯えられる」、長谷川訳は「夜であるいまは保存され」、牧野訳は「今は夜」であるとされた今は「書き留められることによって」保存される」である。すべて限定的な訳になっている。

1 初の文は、たとえば「今と指し示されるもの、これは（私がそう指し示した時点において）夜であり、（その今は私が書きとめることで紙の上に）保存される」となる。関係節の部分は「これは夜であり」に相当する。この訳でも、文意を明らかにするために、丸括弧のなかに語句をおきながら、補いが必要であることには変わりがない。第一のまとまりの訳は同じように補いを各文にくわえることで成ったものである。

5 第二は内容にかかわる。ヘーゲルは第一のまとまりで話し手が「今は」と言った時点が今であることを考慮に入れていない。「今はこれこれの時である」という文が有意味な文になるためには、「今」があらためて現実の一時点（昼）と結びつけられなければならず、「保存」云々にかかわるかぎり、ここでのヘーゲルの議論は成り立たない。

10 それでも、現実の時間帯が夜から昼に変えられたのだから、時間が経てば「今と指し示されるもの」の一方である現実の時点が変わるといふ点は議論のなかにくみ込まれている。「書きとめる」ことを利用して現実の昼と文面とを結びつけることは、ヘーゲルがあらためて「今は」と言ったことに相当し、結果的に議論の実質には狂いがなくなる。これで「書きとめる」を利用したヘーゲルの議論はこの段落の結論である「今と指し示されるものは総じて否定的なものとして存続する」という言明——概念にそなわる性質を指摘する言明——をみちびきだすための布石であると読みとることが可能になる。

15 その議論を——「否定的なもの」ではなく——これまでの検討のように「概念」という語をもちい、なおかつ具体的に言いあらわすなら、話し手によって「今」の概念が現実の一時点に結びつけられないとき、その概念は——「総じて」は「一般的な」と訳されることが多い。この表記は一般の表現としてなじまない。「一般に否定的なものと言われるもの」と訳すことも可能である。

1 現実のどの時点でもない（昼でも夜でもない）、となる。このように解することによっても「総じて否定的なものとして云々」は了解できるものになる。

5 第三は「本質」の移行である。当初の検討で「現実の一時点」も「概念」も「本質」になり得ることがわかったが、ヘーゲルの意図と推しはかれるものに合わせるなら「概念」が「本質」となった。しかしこれはヘーゲルの展開する文脈に合わせた結果である。「今と指し示されるもの」にも「夜と指し示されるもの」にも指示対象がふたつあるという事実には変わりがない。これは「本質」が常に同一ではないことを含意する。この問題をはらんだヘーゲルの議論がどのように続くのか。その過程でどのような議論を展開するのか。このような点にも注意しながら、次のまとまりを見よう。

10 第二のまとまり

このまとまりも一挙に訳出する。——「したがってこの今と指し示されるものとしてそれ自体を維持する〔存続する〕ものは直接的なものではなく、媒介されたものである。と言うのも、それ〔今と指し示されるもの〕は他のもの、つまり〔もうひとつの指示対象だった現実の〕昼や夜が存在しない〔過ぎ去った〕ことを介して、留まるもの・それ自体を維持する〔存続する〕ものとして規定されるからである。その際、それ〔今と指し示されるもの〕は以前と同じくなおまったく単純に今である。そしてその単純性においては、なおそれ自体のかたわらにどのようにも存在するもの〔現実の一時点〕に関わりがない。——

最初の文中にある「この今と指し示されるものとしてそれ自体を維持する〔存続する〕もの」は——ヘーゲルの説明にそくして理解するなら——（直接的に感知され確信される）現実の昼でも夜でもない。だからこれは「直

接的なものでない」となる。これまでの検討にそくしても理解は同様になる。「今と指し示されるもの」は概念にも現実の一時点にもなることができたが、すでに現実の時間の推移を介して変わらぬものが指摘され(三三頁)、その議論を受けて「それ自体を維持する」と限定されれば、「今と指し示されるもの」が「現実の一時点」であることは不可能になるからである。

5   ヘーゲルは「この今と指し示されるものとしてそれ自体を維持する〔存続する〕もの」をさらに「媒介されたものである」とも言い、その理由を「と言うのも、それ〔今と指し示されるもの〕は、他のもの、つまり〔もうひとつの指示対象だった現実の〕昼や夜が存在しない〔過ぎ去った〕ことを介して、留まるもの・それ自体を維持するものとして規定されるからである」と説明する。

10   「今と指し示されるもの」のふたつの指示対象の一方(概念)は、他方の現実の時点が夜から昼になっても相変わらず「今と指し示されるもの」であり、それで現実の時点の変化を介して(その変化にもかかわらず)変わらぬものであることがわかるのだから、たしかに「昼や夜が存在しない〔過ぎ去った〕ことを介して」と語ることは可能である。

15   しかし、これまでの検討に照らすなら、ヘーゲルの述べる「媒介」の問題を常にヘーゲルの考えたとおりに理解しなければならぬ理由はない。ヘーゲルの考え方を確認しながら、これまでの検討にそくしてあらためて考えてみよう。

ヘーゲルはものの在り方を「直接的」か「媒介的」の二分法でとらえる。これはすでに明らかである。第三段落の最後では、「このもの」は「この人」を介して、「この人」は「このもの」を介して、と媒介の在り方を説明していた。その説明をここに適用するなら、「今と指し示されるもの」は現実の一時期である「夜」を介して、

1 その「夜」は「今と指し示されるもの」を介して、ということになろう。このように捉えるかぎり両者とも「媒介されたもの」である。しかしこのように媒介されたからと言って、それだけで「今と指し示されるもの」が留まりそれ自体を維持するわけではない。

5 概念としての「今と指し示されるもの」は指し示される他方の現実の時点が昼でないときでも夜でないときでも用いることができる。いつなんどきでも用いることができる。そのときの「用いる」は「存続する」と言うことも可能である。もちろん生身の人間の念頭や辞書の記述に存続する、という意味においてである。それだけでなく、「現実の時点が昼でないときでも夜でないときでも」を——奇妙な言いまわしであるが——ヘーゲルにそくして「昼が存在しないときでも夜が存在しないときでも」と言い換えることは可能であろう。「媒介」の念を導入しさらに言い換えるなら「昼や夜が存在しない〔過ぎ去った〕ことを介して」と言いあらわすことも可能であろう。ヘーゲルの言いまわしは独特でわかりにくいだが、このように見れば言わんとすることは了解できる。

10 この言いまわしをもう少し検討しよう。この文脈におけるヘーゲルの叙述にそくして理解すると、「今と指し示されるもの」は直接的に感知され存在が確信される現実の昼や夜ではない。それなら「今と指し示されるもの」は感知される昼や夜とは違うものとして「規定される」ということができる。「規定する」は「区別（違い）があるものをそれぞれ別々の語で呼ぶ」と解してよかつたからである。それに媒介の念をくみあわせるなら、ヘーゲルの述べるように「今と指し示されるものは他のもの、つまり昼や夜が存在しない〔過ぎ去った〕ことを介して、留まるもの・それ自体を維持する〔存続する〕ものとして規定される」と言うことも可能である。しかしその「今と指し示されるもの」が「留まるもの・それ自体を維持するものとして規定される」のは、これまでの検討にもとづくなら、それがそもそも人間の念頭や辞書の記述に存続する概念だからである。

説明は異なるが結論は同一になる。これは必ずしも右にゴシック体で記した内容を「直接的」か「媒介的」の二分法でとらえなければならぬものではないことを意味する。だからこの二分法をもちいないでさらに「今と指し示されるもの」の存続について補足してこの部分の検討を終えることにしよう。

この存続はもちろん「概念」にかかわる。これまで「今と指し示されるもの」と訳してきた表現は「今」に定冠詞をつけて記したものである。この表記自体が人間の思考能力を前提にする。しかも、感覚的確信のつくる概念は生身の人間の日常卑近な理解にもとづいていると考えることができ、その検討が日常卑近な生活のなかにある人間の状態に照らしてなされてきたことを考慮するとき、ヘーゲルの述べることをより広くとらえることも可能になる。「今と指し示されるもの」は「今」という語を発してきた無数の人間の無数の体験によって媒介されて成りたっており、だから媒介されたものであり、概念であり、存続する、と。

「本質」の理解に修正をせまるヘーゲル

これで残るのは最後の文だけである。ヘーゲルはその文でこれまでの理解に修正をせまる。感覚器官に固有の働きによって感知され確信されるものが認識にとって必要不可欠なもの（本質）であるという理解にたいしてである。

ではどのように修正をせまるのか。この点を確認するため、「その際、それ（今と指し示されるもの）」は以前と同じくなおまったく単純に今である。そしてそれは、その単純性においては、なおそれ自体のかたわらにどのようにも存在するもの（現実の一時点）に関わりがない」の検討に移ろう。

冒頭の「その際」は前文を受ける。だからこれは「今と指し示されるものが留まるもの・それ自体を維持する

1 ものとして規定された際」の意である。これは問題がない。しかしそれに続く「それ〔今と指し示されるもの〕は以前と同じくなおまったく単純に今である」がわからない。なぜ「今と指し示されるもの」が「単純に今」なのか。

5 この「今」は原文で定冠詞のない大文字で書かれている。その第一の理由はヘーゲルに固有の考えである「直接的」にもとめることができる。「今と指し示されるもの」と言いあらわせるためには、それ以前に「今」の念が話し手の念頭に存在しなければならぬ。その「今」が念頭にあるとき、これは直接的に存在する。この点は自分が「今は」と言うときをふり返って見ればすぐ納得されるであろう。感覺的確信においてはすべてが直接的だったということを思い起こすなら、この点はより明瞭になろう。そのように直接的に存在するものはまだ思考によってとらえられる以前の段階にあるから定冠詞をつけることができない。第二の理由は言語慣習である。時間を表示する語ないしその念が直接的に存在するとき、ドイツ語でも英語でも「今 (Jetzt/now)」は無冠詞でもちいるのが慣用である。この慣用は第一の理由を根拠にしているであろう。

10 大文字で記された無冠詞の「今」はこれで良いとして、ではなぜ「単純に」なのか。原語の *einfach* (英語で *simply*) は「単に」と訳してもかまわないが、ではなぜ「単に」なのか。

15 ここではヘーゲルが「直接的」を二重の意味でもちいていたこと(第三〜四段落四六頁)を思い起こさなければならぬ。特に意識が自覚的に自分にむかない状態を拡大された意味での直接態と呼べると解せた点が大切である。感覺的確信はこの段落で基本的な言語能力と思考能力をもつものとして再構成されているが、ヘーゲルの叙述にそくして考えるかぎり、感覺的確信はこの拡大された直接態のなかにあり、まだ自分をふりかえって見ることがしていない。すでに確認したことであるが、この点は実は第二段落からずっと変わりが無い。

したがって感覺的確信はそれ自体が念頭にいたく「今と指し示されるもの」にたいしてもそれ自体の思考を適用していない。しかも感覺的確信は拡大された意味での直接態にある。当然、この「今と指し示されるもの」も感覺的確信においては「單純に（単に）存在する」ことになる。次の「その單純性において」も同様にとらえることができる。

明らかかなことは「今と指し示されるもの」が感覺的確信にとつては直接的なものであるという点である。このままとまりの冒頭の文では「今と指し示されるもの」が「媒介されたものである」と述べられていたが、それは考察者ヘーゲルにとつてのことである。ここでも感覺的確信は「今と指し示されるもの」が直接的であるか媒介的であるかを知らない。

同じことは生身の人間にも言える。生身の人間は拡大された直接態のなかにある。ふだん自分がどのようにこたばをもちいているかを意識しない。「今」という概念が無数の人の無数の体験によって媒介され生まれていることを意識しない。「今」と言うことが可能になる条件の三点（二八頁）もふだんは意識しない。当然「今と指し示されるもの」は生身の人間にとつても「直接的」に存在する。

感覺的確信にとつても生身の人間にとつても「今と指し示されるもの」が直接的に存在するとあれば、その概念が結びつくはずの現実の時点との関係も直接的なものである。したがって概念としての「今と指し示されるもの」は「なおそれ自体のかたわらにどのようにも存在するもの〔現実の一時点〕に関わりがない」。

もしここで「関わりがない」という表現に抵抗をおぼえるなら、単に「現実の一時点は今と指し示されるもののかたわらにどのようにも存在する」でもかまわない。「それ自体のかたわらに」どのようにでも存在するもの〔現実の一時点〕に関わりがない」と訳した部分の中心にある語は *hervorspielen* である。この語も第三段落に

1 できてきた *beierspielen* と同じく一般の辞書には記載されていない。しかし以上のように解するなら、両語は実質的に同一の意味をあらわすと受けとめることができる。

5 この語がここでもちいられた点で着目しなければならないのは、語の違いではなく、感覚的確信に認識が生まれるために必要不可欠なもの（本質）とみなされていた「単なる存在」が「どのようにでも存在するもの」と述べられていると解してかまわないことである。「単なる存在」が「本質（必要不可欠なもの）」であることがまったく否定されたわけではない。しかしヘーゲルが叙述の重点を移したことは明らかである。

10 この移動が「『概念』が『本質』となることもあれば『対象』が『本質』となることもある」という指摘（二五頁）に端的にかさなるのかどうかはまだ確定できない。しかし、ヘーゲルがどの時どの場にも留まりそれ自体を維持する「今と指し示されるもの」に重要性をあたえていることは明らかである。そうであることを理解するために、最後のまとまりを検討しよう。

### 第三のまとまり

15 これは第七段落の最後のまとまりである。——「昼と夜がそれ（今と指し示されるもの）の存在でない（それが存在することではない）」のとまったく同じく、それ（今と指し示されるもの）は「指示する時点の違いに応じて」昼でも夜でもある。それ（今と指し示されるもの）はそれ自体のこのもうひとつの存在（「今」という語によって指示されて考察の場に存在するもうひとつの（他の）もの、つまり昼や夜という現実の一時期）にはまったく影響をうけない。そのように否定によって存在する単純なものは、このものでもあのものでもない。それはこのものでないもの、「現実存在するものでないもの」である。このものであることにも、あのものであること

1 にも関わらないものを、私は一般的なものと呼ぶ。したがって一般的なもの但实际上には感覺的確信の眞実なのである。――

5 へーゲルはこのままとりまでこれまでの考察をまとめる。語句の省略が多いので内容が簡略化されているとはいえ、冒頭の文はその最初のまともである。前半から処理しよう。

10 その前半でわかりにくいのは「存在」という語である。訳文ではすでに亀甲括弧のなかで文意がとおるようになっているが、このわかりにくさは欧米語と日本語の言いあらわし方の違いによる。「単なる存在」が「単に存在するもの」――場合によっては「単に存在すること」――であったように、「その存在」は「それが存在すること」でもよい。「存在」に対応する欧米語は基本的に「存在すること」と「存在するもの」の二義をもち、どちらで受けとめるべきかは文脈に依存するからである。哲学系の翻訳書ではこの「存在」が頻出し、どの翻訳書でも意味がわかりにくいのが、「今」と「昼」と「夜」の関係を考察しているだけのこの文脈で「存在」が難解なことを言いあらわしているはずはない。「存在」の検討はこれで充分と見なして次の部分に移ろう。

15 と言っても、一読して明らかなように、すでに説明された内容が反復されるだけである。「それ（今と指し示されるもの）」は昼でも夜でもある「は、話し手が「今と指し示されるもの」を現実の一時点と結びつけば、今が昼になることもあれば夜になることもある、の意である。次の「それ（今と指し示されるもの）」はそれ自体のこのもうひとつの（他の）存在<sup>三</sup>によってまったく影響をうけない」は亀甲括弧におきなつたとおりで、「それ自

一二「もうひとつの存在」は、亀甲括弧のなかに「……存在するもうひとつの（他の）もの」とおきなつたが、この補いは既訳を考慮してのことである。原語は Anderssein である。文字どおりに訳せば「他の存在」である。全集訳は「他の存在」、榎山訳は「他在」、長谷川訳は「自分以外の存在」、牧野訳は「他在」に「特殊例」をおきなう。いずれも一読

1 体のこのもうひとつの存在は「『今』という語によって指示されて存在するもうひとつの他のもの、つまり昼や夜などの現実の一時期」を指す。「今」の概念は現実の一時点が昼であるか夜であるかに関わりなく存在するのだから、「今と指し示されるもの」が「まったくその影響を受けない」のは当然である。

5 第三の文「そのように否定によって存在する単純なものは、このものでもあのものでもない」は、単に「否定的なもの」の意味を別の表現で言いあらわしたものにすぎない。要するに概念は現実に存在する個別の「このものやあのもの」ではないというだけのことである。第四の「それはこのものでないものである」も実質的に同意である。「否定的なもの（概念）」は「現実に存在する対象でないもの」だからである。第五の「このものであることにも、あのものであることにも関わらないものを、私は一般的なものと呼ぶ」となると、これまでの検討において「概念」と呼んできたものを、ヘーゲルがまだ自分独自の「概念」を提示しない段階にあるため、「一般的なものと呼ぶ」と命名しただけのことになる。

10 ヘーゲルは、以上の内容を承け、第三のまとまりの最後になる文で「したがって一般的なものが実際には感覺的確信の真実なのである」と述べる。当然、この最後の文をヘーゲルが第七段落で述べたかった結論と受けとめなければならない。第三段落では「単なる存在」を感覺的確信の真実と述べていたのだから、この結論が世の中に存在するものは物的なものだけだと思いがちな世間の通念を念頭においていたと見ていいことは見やすい。と同時に、これまでの検討に照らすなら、この結論が事態をかなり簡略化したところで述べられていることも見やすい。以下にその点を確認しよう。

して理解できる日本語ではない。これも漢語をもちいて一対一で原語を訳す無理をしめす一例である。

## 1 「感覺的確信の眞実」といふ言ひ方

第五段落から「対象が感覺的確信によつて言われるとおりの本質として實際に存在するかどうか」を考察してきたヘーゲルは、第七段落の最後で「一般的なものが感覺的確信の眞実である」と述べる。対象と本質との關係を考察してきた結果えられた結論が「感覺的確信の眞実」といふ言ひ方である。と云うより——途中の議論が一部で成り視線はこの結論で感覺的確信の在り方に転じたと思ふべきではない。と云うより——途中的議論が一部で成りたたなかつたとはいへ——この結論をみちびきだすために第五段落からの考察がはじまつたと見なければならぬ。その過程をもう少し詳しく検討しよう。

5 これまでのヘーゲルの説明によれば、感覺的確信は直接的であり、自分がなにを確信しているかをふだん自覚してゐないが、それでもなにごとかを確信している。感覺的確信がさう確信している対象をヘーゲルは第三段落で「単なる存在」と述べていた。具体的には、段落の冒頭で、その「単なる存在」を「**感覺的**」確信はそれ自体の眞実として**言ひあらわす**」と記してゐた。しかしこの表現も實際には省略的な表現である。もっと詳しく見てみよう。

10 基本的な言語能力と思考能力をそなえた段階にある感覺的確信は、感覺器官に固有の働きによつて、外界になにものかを感知する。たとえば花をひとつ見る。感覺的確信はその存在を確信する。感覺的確信には「知らない認識 (ein Wissen)」が生まれる。その認識をささえるのは感知されたとき外界に存在する現実の花である。こ

15 一三 この結論の文が省略的であるだけでなく、「感覺的確信の眞実」のように「眞実」をもちいた類似の表現がヘーゲルの文章に頻出するので、後々そうした表現につまづかないためにも「感覺的確信の眞実」といふ言ひまわしを検討する必要がある。

1 の外界に感知され存在するのはその認識の成立と存在にとって必要不可欠なもの（本質）である。現実①に咲いている花がなければ認識が生まれず、そのままでは感覚的確信は空白なままにとどまるからである。

5 したがってその外界に感知され確信されるものは、当然、感覚的確信の存立にとっても必要不可欠なものである。と同時に、「感覚的確信」は gewiß (確信している) からつくられた名詞だから、原文で属格で（英語では所有格で）「感覚的確信の」と限定されるものが確信される対象になる。

10 その確信される対象をヘーゲルは最後のまとまりで「真実」と述べる。ここで「真実の」の語義②「現実に存在する」を「現実に存在するもの」と名詞化しよう。そうすると、感覚的確信の「真実」は前頁に引用したように「単なる存在」だったのだから、「単なる存在」≡「感覚的確信の真実」≡「感覚的確信が確信している対象である現実の存在（もの）」という等式が成りたつ。（日本語の場合、最後の項を「感覚的確信にとって現実に存在するもの」と表記しても意味は変わらない。）

ところがこの第七段落でヘーゲルはその「真実」を「一般的なもの（概念）」であると述べる<sup>④</sup>。この段落にいたって「真実」を「単なる存在」から「一般的なもの（概念）」へと転じる。「概念」が現実に存在するものであると述べる。この結論は生身の人間が抵抗をおぼえるのに充分なほどに刺激的であろう。

直接的な「単なる存在」を感覚的確信の「真実」と述べることから考察をはじめたヘーゲルは、「今と指し示されるもの」の考察をおして議論を「一般的なもの（概念）」へと展開したのだから、そのように展開してきたヘーゲルの思考にとって——そしてその展開にとっても——たしかに「一般的なもの（つまり「概念」、具体一四 その「真実」の原語はこれまでと違って das Wahre である。形容詞 wahr に定冠詞をつけてそのまま名詞化したものである。当然これは具体的なものを指す。それもこの文脈では唯一のものを指す。

1 的には「今と指し示されるもの」という概念」が「必要不可欠なもの（本質）」であると同時に「感覺的確信の眞実（感覺的確信が確信している対象である現実の存在・もの）」になる。

5 結果的に、この結論にたどりつく過程で「単なる存在」は「本質（必要不可欠なもの）」から「それ自体（今と指し示されるもの・一般的なもの）」のかたわらにどのようにも存在するもの」に転落する。考察の展開プロセスにそくして考えるかぎり、このように言いあらわすことができ、そのかぎりヘーゲルの述べることはまったく正当である。

10 この展開プロセスを感覺的確信がみずから歩むのであれば、感覺的確信にはここで新たな視野がひらけ、その過程で単なる存在はこれまでもっていた（唯一の）「必要不可欠なもの（本質）」という座からすべり落ち、従属的な立場にあるものとして捉えなおされることになる。つまりヘーゲルの用語では止揚される（新たにひらけた視野のなかでこれまでの在り方を破棄され、あらためて据えなおされる）ことになるであろう。しかしこのプロセスはここで生まれていない。考察しているのはヘーゲルだけであり、感覺的確信はその考察になんら関与していないからである。

15 それだけでなく、ヘーゲルの叙述は展開される議論の先端に焦点をあわせるため、かなりの省略がある。「物的存在」とも訳される「もうひとつの（他の）もの」が記された箇所などはその最たるものである。その省略的叙述のために「感覺的確信の眞実」の内容自体が省略的で、全体像が見えなくなっている。

事實は、ことばをもちいるかぎり、一方に単なる存在、他方に一般的なものがあり——つまり一方には現実のものがあり、他方にはそれに対応する概念があり——それでものごとの認識が成りたっている。双方が認識にとつては必要不可欠なもの（本質）である。したがってこの考察の場において「感覺的確信の眞実（感覺的確信が

1 確信している対象である現実の存在・もの」がなんなのかと問うなら、「単なる存在」と「一般的なもの」の双方になる。ヘーゲルの叙述はその重点を一方から他方に移しただけのことになる。この点は後にもう一度とりあげるが、この叙述には明確な意図がある。その意図のひとつがどんでん返しであることは明らかであるが、それだけではあるまい。

5 ではヘーゲルの意図はどこにあるのか。以後の段落で検討すべきものは、むしろ、その意図になる。

#### 四 第八段落

10 この段落も一挙に訳そう。ヘーゲルの主張にふくまれる問題点はすでに明らかであり、検討も一挙に進めることができるからである。ただ、前段落の最後に提示された「一般的なもの」を基礎にすめられる叙述はかなり粗く、論理の飛躍がめだち、内容の質もこれまでとは変わってくる。「今と指し示されるもの」が「このもの（これと指し示されるもの）」にもどされ、「ことば」と「思いなし」の対比が入ってくると同時に、一挙に視野が拡大したと読むべきであろう。

15 — 感覚器官に固有の働きによって感知した（個別の）ものを（表出するとき）われわれは（それを）一般的なものとして「ことばに」もあ、ら、わ、す。われわれが言う「言おうとする」のは「現実に存在する個別の」このものであるが、「書きとめられたのは」一般的なもの、「どれにでも適用できる」「このもの」ないし「これと指し示されるもの」ということばである。あるいは「われわれが言おうとするのは」それ、「このもの」が存在する、ということであるが、その「存在する」は総じて、「なんにでも適用できる概念ないし語としての」存在する、である。もちろん、その際、われわれは一般的なこのものや「ものごとが」一般に存在することを脳裏に想い、

描いいているわけではない。「思いい描いいているのは個別の対象である」「このもの」である。」それでもわれわれが言いいあらわす、「口にする」のは一般的なものの「概念」である。すなわちわれわれがこの感覚的確信においてことばにしたものは、決してわれわれがそれを「感知して」思いいなずとおりになつていない。しかしことばの方が、われわれの理解したように、「思いいなしより」もつと真実のものである。われわれは、ことばにおいて、みずから直接的に「無自覚なままに」自分の思いいなしに反駁する。そうして一般的なものが感覚的確信の真実であり、ことばはこの真実だけを表現するのだから、われわれが思いいなしている感覚的な存在をいつか「ことばで」言いえるようになることはまったくあり得ない。――

右の訳文には注釈が必要である。この段落では、コロンとセミコロンで区切られた語句と短文が連続する箇所がある。日本語にはこのふたつの記号に対応する記号がなく、そのまま語句と短文を訳出すると前後の関係が見えにくい。だから必要な語彙をおぎなつて訳してある。それに加えて、これまで「私」と訳してきた *Mein* を「われわれ」に変えてある。内容が一般に人間に当てはまるものになつてゐるからである。

ヘーゲル自身による内容のまとめ

ヘーゲルは冒頭の文でこれまでの内容を整理する。「感覚器官に固有の働きによつて感知した〔個別の〕ものを〔表出するとき〕われわれは〔それを〕一般的なものとして〔ことばに〕もあらわす」がそれである。感覚器官によつて感知するのは個別のものであり、そのためわれわれは個別のものを感知し、個別のものについて話していると思いいなず、そして個別のものは仔細に見れば無限に異なつてゐるであらうが、それを指し示すときにもちいる語はいつも同一（たとえばいつも「今」）であり、われわれはそれ自体の性質として、一般いな（他のどれ

1 にも適用できる)語ないし概念を利用する、がその真意である。

このように捉えれば、これに続くふたつの文でヘーゲルの言わんとすることは読みとれる。「書きとめる」操作を読みこまなければ文章がつうじないので、訳文ではそれをおきながら、ヘーゲルはここで「もの」と「ことば」を明確に書きわけていない。亀甲括弧のなかで種々の語句をおきながらもヘーゲルの文章がいくぶん奇異に見えるのはそのためである。そうした奇異な面は無視して検討をつけよう。

5 まず「もちろん」ではじまる文である。ヘーゲルはこの文で「その際、われわれは一般的なこのものや(ものごと)が」一般に存在することを脳裏に想い描いているわけではない」と述べる。その主語「われわれ」は、拡大された直接態のなかにある感覚的確信(ないしは生身の人間)である。「一般的なこのもの」は「今と指し示されるもの」が一例になる。それをこれまでの検討では「概念」と呼んできたが、生活のなかで種々のことを話したり書いたりするとき、常に概念を意識したり概念の内容を脳裏で想い描いたりする者はいない。だから人間はことばをもちいるとき、たしかに、「一般的なこのものや(ものごと)が」一般に存在することを脳裏に想い描いているわけではない。

10 この事実は再構成された感覚的確信だけでなく卑近な日常のなかにある生身の人間にも妥当する。生身の人間はふつう個別のものについて語っているつもりである。ところがその人間が、「言いあらわす(口にすること)は一般的なもの(ことば)」である。要するに生身の人間はふつうことばの一般性に気づいていない。だから「われわれがこの感覚的確信においてことばにしたものは、決してわれわれがそれを(感知して)思いなす」とおりにはなっていない。この文は、一読して明らかのように、「脳裏に想い描く」と記された活動が「思いなす」と言い換えられただけである。「想い描く」は学術的な著作で「表象する」と訳されることが多いが、この翻訳語は

まだ一般の語彙になっていないと思われるのもちいない。しかし言い換えられた「思いなす」は——すでに一度もちいている（一三頁）が——これは文章語としてまだ存在しているであろう。

5 その原語 (Meinen) がこの文脈でなう意味は「個人がどのようにも思う・考える」である。「個人」の活動であることが明らかになっていれば「思う」でも「考える」でも一向にかまわない。ヘーゲルの展開した文脈で問題となっているのは「思いなす」と「ことばにする」との食いちがいだからである。

その食いちがいを具体のなかで検討してみよう。生身の人間であれ、ヘーゲルがそれを再構成した感覚的確信であれ、日々なにごとかを感ぜ、なにごとかを考える。それがこの文脈で「思いなす」と訳した語の現実における意味である。その感ぜ考えることを人に伝えようとすれば、普通は、ことばをもちいなければならぬ。

10 ところが、実際に感ぜ考えたことは、そして現実に起こることや存在するものは、どれもある特定のとき特定の場で生じた特定の（個別の）ものごとであるにもかかわらず、その個別のものごとを言いあらわすときにもちいる個々の語は、「今」や「夜」や「昼」などに明らかにならず、どれも一般的なものである。だからこそ「これこれと言われるものひとつ」という不定冠詞をささえる基本的な考え方も生まれるわけであるが、個別のものこの個別の様相はその表現から窺うべくもない。

15 実際、「今は夜である」と言われても、この文だけでは、その夜がどのような夜であるかはわからない。念のため他の事例も見てみよう。だれかが頭や腹の痛みをうったえても、周囲の者がそれを感じることができるとはではない。「痛い！」という訴え自体、他のとき他の人にも適用できる一般性をもつ。だれがどれほどの体験をかさねても、生死の境をさまよっても、それを言いあらわしたことばの文面は、それ自体として見れば、意外に平板である。その平板さは、読む者が体験の当事者でないという事実にくわえ、その体験が数多くの類似の体験

1 のひとつとして受けとめられるところからもやってきているであろう。体験を直接に表出することは体験の重みをあらわさない。にもかかわらず、当事者以外の者にとって、事態を理解する手がかりは——表情や身振りを目の当たりにできる場合はともかく、そして映像をここで考慮からはずすなら——ことばだけである。

## 5 不十分なヘーゲルのまとめ

この事態はことばが現実の脈絡や文脈に依存して機能することをも意味する。文面がまったく同じでも、指し示す現実の状況は大きく異なる可能性がある。当然ヘーゲルの叙述もこの可能性をまぬがれない。「**「真実」**をふくむ文「**ことばの方が、われわれの理解したように、(思いなしより) もっと真実のものである**」には、文脈を變えるなら、すぐさま現実や体験の軽視へと通じかねない危うさがある。

10 ここでその危うさを指摘したのはヘーゲルを受け入れる態度に代々この傾向が見えるからであるが、この傾向が存在してきたこと自体が、この文言の脆弱性を示す。右の言明で「**ことば**」と訳した語は原文で *Sprache* (英語と仏語では *language*) である。この語をもちいた段階で内容は一挙に一般化されている。これまでのヘーゲルの議論で「一般的なものは「今と指し示されるもの (*das Jetzt*)」などの三概念だけだったのだから、ヘーゲルの脳裏においてはおそらく「**思いなす**」と「**ことばにする**」との食いちがいが前面にできたときから、内容はすでに一般化されており、それが *Sprache* の導入となったのであろう。結果的に視野が一挙に拡大し、この段落で内容をまとめはじめたヘーゲルのことばは、そのことばだけでは、対応する現実を一義的に限定するだけの力をもたなくなっている。

そのためかどうか、文をひとつおいて記される「**われわれは、ことばにおいて、みずから直接的に(無自覚な**

「ままだに」自分の思いなしに反駁する」も——基本的な意味はすでに前頁に記したとおりであらためて検討するほどではないが——文意だけを取りだすなら、体験の重みを伝えたいことばの基本的な性格を言いあらわしたただけにもなり得る。しかも文中にある「反駁」はだれにでも当てはまる。ヘーゲルにも当てはまる。その「反駁」はヘーゲルをして思索へと駆り立てた当のものにもなり得る。その思索が嵩じるところで、段落の結論「一般的なものが感覺的確信の真実であり、ことばはこの真実だけを表現するのだから、われわれが思いなししている感覺的な存在をいつか〔ことばで〕言えるようになることはまったくあり得ない」が生まれてきた可能性さえ読みこむことができる。

「この真実だけを表現する」も大きな飛躍である。ヘーゲルがこれまでに「論証」したと言えるのは語ないし概念の一般性ではない。その一般性の吟味もおこなわず、吟味する者の在り方も考察せず、言明する行為に読みとるべき「措定」の實質をなす③と④を考慮することもなく打ちだされる「真実」は正直なところ受けとめようがない。それにもかかわらず右の可能性が読みとれるとあれば、その背後にイエスの生涯と他の人間とのあいだにある大きな断絶への注視があったと読みこむことも可能になる。第七段落の結論には二重の意味が読みとれるのである。そう読みとつた場合すでにこの「感覺的確信」の章に第八章「絶対知」が設定されていたと受けとめることも可能になる。

したがって、そして現実には真実ならざることばの方が多し点を考慮に入れるとき、この結論部にある「こと

ばはこの真実だけを表現する」は、ヘーゲルの展開した文脈だけでなく、読む者自身が種々の限定をくわえて読  
 一五 だから価値判断をこめて「思いなし」の原語 *Meinung* を訳すのは避けなければならない。全集訳では「私念」、  
 山沢と長谷川訳では「思いこみ」である。前者は否定的な響きをおびかねない。後者は明らかに否定的な響きをもつ

1 まなければ、意味をなさなくなる。しかも、この文を受けとめるときには、読者が経験をおして見知っている  
現実ですぐさま訴えるのではなく、ヘーゲルの展開した筋道を考慮にいれて想定される現実を限定しなければな  
らないのである。

5 ヘーゲルがことばを換えて何度も指摘することばの一般性は、人間がことばをもちいるかぎり避けがたい。ど  
れほどに熾烈な関心を現実になりたいして抱こうとも、その現実を言いあらわす個々の語は一般的である。文も文章  
もすでに十分にルテイン化しており、一般的である。その一般性を克服しようとするなら文章を書く者は巧ま  
なければならぬ。自分の生きる現実にそくしたことをうみだすために巧んだ結果はことばの独自の結びつき  
となってあらわれるが、その結びつきも個々の語の一般性をおしてあらわされることでは変わりがない。この  
10 事態の嵩じるところ、書物は世界を介して否定的に読まれるという指摘につうじてゆくが、その基本はだれもが  
生活のなかで体験する。これは数多く体験するほど、そして痛感する度合いが強いほど、ことばへの不信をやし  
なう事実である。

15 第八段落の文章からは概略このような考察がみちびきだせるが、ヘーゲルは結論として打ちだした「感覚的確  
信の真実」にかんする考察をまだ終えていない。次段落ではその結論を「此処」に適用し、「媒介」を導入して  
ふたたび「一般的なもの」を強調してから、第十段落でその結果を「自分」との関連で考察して一応の締め括り  
をつける。基本的でありながら検討すべき事柄はヘーゲルの意図をふくめまだまだ残っているが、ここではこの  
流れを考慮して第九段落の検討に移ることにしよう。

五、第九段落

この段落は短い。それだけでなく、実質的な内容は「今」が「此処」に変わっただけである。それは一読すれば明らかなので訳出するだけにしよう。

——このもののもうひとつの形である此処についても事態は同一であろう。此処と指し示されるものはたとえば〔私の目の前にある〕木である。私が向きを変えたとこの真実は消えうせ、その反対になる。つまり此処と指し示されるものは木ではなく家になる。〔それでも〕此処と指し示されるものそれ自体は消えておらず、家や木などが消えても、あいかわらず家や木である。だからこれと指し示されるものはここでもそれ自体を媒介された単純なものないしは一般的なものとして提示する〔ここでも媒介され単純なものないしは一般的なものとしてあらわれる〕。——